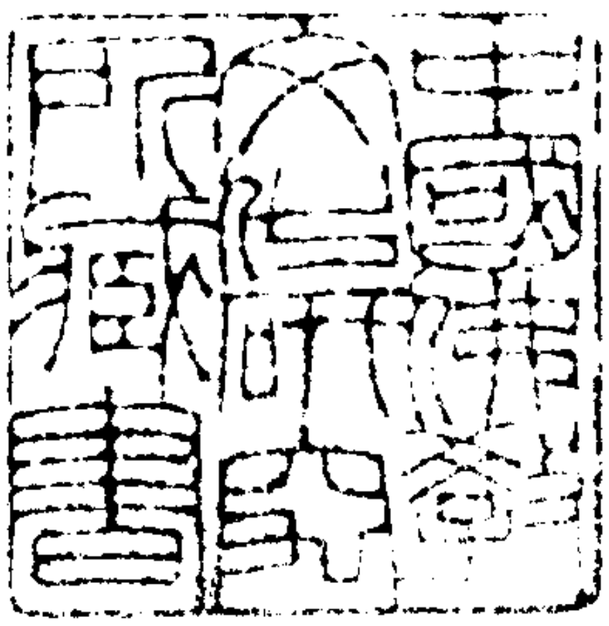
000365

弘法大師 空海全集

第二巻



筑摩書房

上新請來經等目録表

入唐學法沙門空海言空海以去延
暦廿三年銜　命留學之末問津
萬里之外其年臘月渉到長安廿四
年二月十日准勅配住西明寺爰則
周遊諸寺訪擇師依幸遇青龍寺灌
頂阿闍梨法號惠果和尚以為師主其
大德則大興善寺大廣智不空三藏
之付法弟子也弋釣經律該通密藏
法之綱紀國之所師大師尚佛法之流
布欲生民之可拔授我以發菩提心
戒許我以入灌頂道場沐受明灌頂
兼三昧耶受阿闍梨位一度也肘行膝歩
擎香擎鉢首接足聞不聞幸賴國
家之大造　大師之慈悲擎兩部之
大法習諸尊之瑜伽斯法也則諸
佛之肝心戒佛之住跡於國城擲於
人膏腴是故薄命不聞名重垢不絜
入印度則輸婆三藏脱躡負扆振
旦則　玄宗皇帝景仰忘味從余
已還一人三公接武孰號四衆萬民
稽首鼓篋密藏之宗自茲稱帝半

凡例

一　本巻には『秘蔵宝鑰』、『辯顯密二教論』、『即身成仏義』、『声字実相義』、『吽字義』、『般若心経秘鍵』、『秘密曼荼羅教付法伝』、『真言付法伝』、『請来目録』、『真言宗所学経律論目録』を収めた。

一　『秘蔵宝鑰』、『辯顯密二教論』、『即身成仏義』、『声字実相義』、『吽字義』、『般若心経秘鍵』、『秘密曼荼羅教付法伝』、『真言付法伝』、『請来目録』の九篇は、上段に訓み下し文、下段に現代語訳を掲げた。

一　『請来目録』、『真言宗所学経律論目録』の目録部分は、その性質上、一段組とした。

一　『真言宗所学経律論目録』は、それぞれの経典の『大正新脩大蔵経』に該当する巻数・頁数を訳注で示した。

一　訓み下し文、現代語訳、訳注の作成にあたっては、長谷宝秀編『弘法大師全集』（増補第三版）を底本とした。

一　本書の構成を分かりやすくする目的で、適宜、本文の内容を分科し、〔　〕内に見出しを付したものもある。

〔訓み下し文〕

一　訓読は原則として前記『弘法大師全集』に付された訓みに従ったが、一部に勝又俊教編修『弘法大師著作全集』を参照し、また訳者独自の判断によって、訓みを改めたところもある。

一　訓み下し文は、内容に従って適宜改行をほどこし、句読点・並列点（・）を入れて読みやすくした。また、底本

で二行割書きとなっている箇所は、〈　〉を付して小活字で一行に組んだ。

一　漢文の助字、もしくは副詞・代名詞・接続詞その他に相当する漢字の多くを仮名書きに改めた。

（例）　夫　若　是　此　之　其　以　云　曰　言　謂　即　則　乃　又　亦　復　有　無　所　不　非　也

ただし、とくに意味を考えてそのままとした場合もある。

一　底本に使用されている古字・略字・俗字などの異体字は、おおむね正字体、もしくは現行の字体に改めた。

（例）　漫茶羅・曼荼羅→曼荼羅　陁→陀　寂→最　虚→虚　職→職　鉤→鉤　迴→廻　皷→鼓

躭→耽　羝→羝　寻→碍　弃→棄　躰→体　薀→蘊

なお、あえて通行の字体に改めなかったものもある。

（例）　辯・辨（弁）　龍（竜）　廻（回）　燈（灯）　毗（毘）　慧（恵）　癡（痴）

一　訓み下し文のみ、仮名遣いをすべて歴史的仮名遣いとし、難読語、仏教独自の読み方をする言葉をはじめ、漢字にはできるだけ多くのふり仮名をほどこした。ただし『請来目録』の目録部分、『真言宗所学経律論目録』のふり仮名は現代仮名遣いとした。

一　経論などの書名には『　』を、引用文に相当する個所には「　」を付した。

〔口語訳〕

一　下段に掲げた口語訳は、上段の訓み下し文と対照しつつ読むことができるよう、できるだけ原文に忠実に、かつ平易な訳をむねとした。

一　訳文中の（　）は、文意をとりやすくするため、原文にない語句を訳者が補ったことを示し、小さな〔　〕は、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

原文に出てくる術語を補って、上の訳語との関係を明らかにしたものである。また小さな（　）で挿入したものは、上の術語に対する簡略な説明である。

〔訳　注〕

一　仏教の専門的な術語や難解な語句には、訓み下し文に指示番号を付して、注記を掲げた。

一　とくに真言密教の術語の詳しい解説を「補注」として、第一巻末尾に掲げてあるので、併せて参照されたい。

一　本文中の経論などの引用個所の出典については、注記に『大正新脩大蔵経』の該当する巻数・頁数・上、中、下段の別を、（大正二三・一八九上）のように表示した。

一　本文に出てくる音写語は、注記にその原語（梵語）の音を片仮名書きとローマ字で掲げた。

本巻の訓み下し文、口語訳、訳注の作成に際しては、それぞれが原稿を用意し、全体を通じての訳文の体裁、訳語、注記などの調整を宮坂宥勝が担当した。

目

次

凡例……v
秘蔵宝鑰……宮坂宥勝訳注……三
巻上……五
序……五
第一異生羝羊心……一六
第二愚童持斎心……二三
第三嬰童無畏心……二八
巻中……四三
第四唯蘊無我心……四三
第五抜業因種心……七八
巻下……八九
第六他縁大乗心……八九
第七覚心不生心……九六
第八一道無為心……一〇三
第九極無自性住心……一一三

第十秘密荘厳心……二二七
辯顕密二教論……佐藤隆賢 訳 注……一四七
巻上……一四九
巻下……一八九
即身成仏義……松本照敬 訳 注……二一九
声字実相義……松本照敬 訳 注……二六三
吽字義……小野塚幾澄 訳 注……二九九
般若心経秘鍵……松本照敬 訳 注……三四七
秘密曼荼羅教付法伝……宮崎忍勝 訳 注……三七七
巻第一……三七九
巻第二……四二四
真言付法伝……宮崎忍勝 訳 注……四八五
請来目録……真保龍敞 訳 注……五二九

真言宗所学経律論目録……真保龍敞訳注……五七
解　説……五九

第二卷

思想篇二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

秘蔵宝鑰

宮

坂

有

勝

訳

注

秘蔵宝鑰　巻上　序を幷せたり

沙門遍照金剛　撰

序

悠悠たり悠悠たり太だ悠悠たり
内外の縑緗　千万の軸あり
杳杳たり杳杳たり　甚だ杳杳たり
道をいひ道をいふに百種の道あり
書死え諷死えましかば本何がなさん
知らじ知らじ吾も知らじ…（欠文）…
思ひ思ひ思ひ思ふとも聖も心ることなけん
一牛頭　草を嘗めて病者を悲しみ
二断菑　車を機つて迷方を愍む
三三界の狂人は狂せることを知らず

限りなく、きわめて限りないことよ、ああ
仏典と仏典以外の書物とは千万巻もある
広く深くして、きわめて広く深いことよ、ああ
さまざまな道を説くのに百種の道がある
それらを書くこともなく暗記することもなければ、教えの根本をどうして伝えることができようか
もしも、そうしなければ、誰ひとりとして教えを知る者もなく、もちろん、わたしもそれを知らないであろう…（欠文）…
どんな教えのことを考えてみても、たとえ聖者だって、それを知ることはないであろう
神農氏は病める者をあわれんで草木をなめてみて薬草をつくった

四生の盲者は盲なることを識らず
生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く
死に死に死に死んで死の終りに冥し
空華、眼を眩かし、亀毛、情を迷はして、実我に謬著し、酔心、封執す、渇鹿野馬、塵郷に奔り、狂象跳猨、識都に蕩るが如くに至つては、つひんじて十悪、心に快うして日夜に作り、六度、耳に逆らうて心に入れず。人を謗じ法を謗じて焼種の辜を顧みず。酒に耽り色に耽つて誰か後身の報を覚らん。閻魔獄卒は獄を構へて罪を断り、餓鬼禽獣は口を焔して体に挂く。三界に輪廻し、四生に跨蹠す。大覚の慈父、これを観て何ぞ黙したまはん。この故に、種種の薬を設けて種種の迷ひを指す。意、これに在るか。

ここに三綱五常を修すればすなはち君臣父子の道、序あつて乱れず。六行四周公旦は方角の分からぬ者に指南車をつかって教えてやった
迷いの世界の狂えるひとは狂っていることを知らない
眼の見えない者にもひとしい生きとし生けるものは、自分が眼の見えない者であることに気づかない
われわれは生まれ生まれ生まれ生まれて生のはじめに暗く
死に死に死んで死の終りに冥い
眼を病む人が空中に花を見たり、亀の苔を尻尾だと見あやまったりすることがあるものである。そのように、世のつねの人は自分の体をほんものの自我であると思いあやまって、それに執われ、本心を失い、かたくなに執著する。のどの渇いた鹿や馬が陽炎を水と思いあやまるように、迷える者は感覚の世界を追いもとめ、象がたけり猿が飛びまわるように、体のままにまかせている。このようにして、日夜にもろもろの悪事をよいことにしており、善いことはかえりみない。人をそしり教えをそしって、それが目ざめたものとなる可能性を焼きほろぼすことになるのを考えない。いたずらに酒や色欲にのみ夢中になって、あとでどんな報いを受けるかということを知っていない。死の世界の主とその従者は牢獄をかまえて断罪する。そこで、餓鬼の世界に落ちた者は口から炎を吐き、あるいは畜生の世界にいった者は重石を体につけて、苦しむ。迷い

禅を習へばすなはち厭下欣上の観、勝進して楽を得。

九唯蘊に我を遮すれば、一〇八解六通あり。

二因縁に身を修すれば、空智、種を抜く。無縁に悲を起し、唯識、境を遣ればすなはち一三二障伏断し、一三四智転得す。

一四不生に心を覚り、独空慮絶すればすなはち一心寂静にして不二無相なり。

一五一道を本浄に観ずれば、一六観音、熙怡し、一七法界を初心に念へば、普賢、微咲したまふ。

一八心外の礦垢、ここにことごとく尽き、一九曼荼の荘厳、この時、漸く開く。二〇摩吒の恵眼は無明の昏夜を破し、日月の定光、二一有智の薩埵を現ず。二二五部の諸仏は智印を擎げて森羅たり。二三四種の曼荼は法体に住して駢塡たり。二四阿遮一睨すれば業寿の風定まり、二五多隷三喝すれば、無明の波の世界において生死をくりかえし、生きとし生けるものの世界にさまよう。慈しみ深い父のような偉大な覚者（仏）はこれを見て、どうして黙っておられることがあろうか。だから、いろいろな教えをもうけて、さまざまな迷いを指摘されるのも、その本心はほかならぬここにあるのである。

そこで、儒教の人倫の道、個人道徳をおさめれば、君主と臣下、父子の道はとともに乱れない。六行・四禅という瞑想を実行すれば、人間界を厭い、天上界をよろこぶところの観念がますます発達して心の安らぎがえられる。

ただ存在を構成する要素だけがあるとみて実体的な自我を否定すれば、八種の瞑想力を観想して、六つの不可思議な能力がえられる。

十二の因果関係を体得すれば、実体的な自我は存在しないとする智慧によって根源的な無知のもつ可能力をのぞくことができる。

絶対の慈愛の心をもって、万有はただ識のみとしてあらゆる認識の対象の実在を否定すれば、煩悩と所知との二つの障害を断ち、迷える者の心を仏の智慧にかえることができる。

心の絶対の本性をさとり、唯一の空無を知って思慮分別を絶つならば、心はしずまって絶対で現象を離れたものとなる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com